



「少子化に対応した子どもにとって望ましい教育環境の在り方について」審議のまとめ(素案) (概要版)(案)

平成30年4月 日
長野市教育委員会事務局 学校教育課 小中高連携推進室
電話:026-224-5081(直通) FAX:026-224-5086
E-mail:gakukyou@city.nagano.lg.jp

「長野市活力ある学校づくり検討委員会」では、平成28年7月に市教育委員会から諮問を受け審議を重ね、このたび、～笑顔あふれる豊かな教育環境～「審議のまとめ(案)」がまとまりましたので、皆さんのご意見をお寄せください。
・お寄せいただいたご意見を反映させ、6月末に市教育委員会へ答申する予定です。
・詳細は、「審議のまとめ(案)」をご覧ください(括弧内数字は本文の頁番号)。

I 本市の教育環境

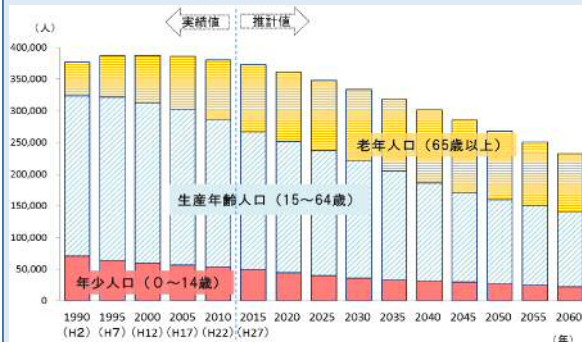
(次のような現状があります) (2～8頁、25～30頁)

【社会の動向】

○人口減少、少子・高齢化の進行

・2010(平成22)年を基準とした2060年の変化率は、総人口は39.1%、年少人口は58.6%、生産年齢人口は49.2%の減少が見込まれる一方、老年人口は2.5%の減少とほぼ変わらない状況が見込まれています。

長野市の人口の推移と推計



○高度情報化、グローバル化の進展

・人口知能やロボット技術が社会や生活を大きく変えていくという予測等があり、社会は加速度的に変化し、複雑で先を見通すことが一層困難になってきています。



○地域のつながりや支え合いの希薄化

・かつては地域とのつながりも今より密で、親以外の大人に囲まれ、

年の違う子どもと遊ぶことで、自ずと子どもたちは社会性を育んでいきましたが、近年は都市化や生活様式の変化等により、多くの人と触れ合う環境が失われつつあります。



II 審議の中で見えてきたこと (「子どもにとって望ましい教育環境」を考えるにあたり、次の視点を大切にしたいと考えました) (10・11頁)

どの発達段階にあっても「集団の中での学び」が大切

そして

できる限り「地域に学校を残したい」

【◇ 発達段階に応じた学びは どうあるべきか】

○友達との遊びの中にも学びがあり、気付かぬうちに学ぶ意欲・態度や人間性等を育んでいるのではないかと。
○小学校高学年以上では集団の中で学ぶこと、専門的な学びや多様な経験が大切ではないかと。
○小学校高学年と中学校の連携が大切ではないかと。
○小学校中学年までは少人数になった場合でも、地域の見守りの中で育つことや通学距離の問題への配慮が必要ではないかと。



【◇ 発達段階に応じた学びを実現するためには どうあったらよいか】

○協働学習や共同作業により、子ども同士が互いの学び合いを通じて自己の考えを広げ深めることが大切ではないかと。
○音楽や体育はある程度の集団が必要ではないかと。
○学年が上がるにつれ大きな集団環境が大事ではないかと。
○少なくとも小学校高学年以降は、学年に複数の学級が望ましいのではないかと。
○学級数が少ないと、教員の数も少なくなり、学習保障や教育の質の保障が難しいのではないかと。
○財政面から、小規模校が増えることは、ある程度の歯止めが必要ではないかと。
○PTA役員等の保護者負担も考える必要があるのではないかと。



【◇ 地域との関わりは どうあったらよいか】

○地域により地域とのつながり方が異なり、それぞれの地域にあった学校群(グループ)を考えたほうがどうか。
○施設の複合化や多機能化の検討も必要ではないかと。
○通学区と行政区は、いずれは一致させるべきではないかと。

III 子どもにとって望ましい教育環境とは (これからの学校で大切にしたいことを考えました) (12～17頁)

子どもの成長を考えたとき

【◇ 発達段階に応じた多様な教育環境が必要ではないでしょうか】

○子どもの育ちの連続性と発達段階に応じた教育環境を整えることが大切ではないでしょうか。

← 連続した9年間 →		
小学校	中学校	
1から4年生	5・6年生	中学生
低・中学年期	高学年期	中学生期
「個」の育ち	「集団」の中の育ち	「自立への育ち」

次頁「18歳までに育てたい具体的な姿や能力・態度(長野市)」

【◇ 多様性の中で育つものは大切ではないでしょうか】



《 好ましい人間関係をつくる力 》

○いろいろな個性あふれる集団の中で遊び、自分と意見や考え方が違う他者との協力的な学びを通して、自らを確立するとともに、好ましい人間関係づくりの力を育むことが大切ではないでしょうか。

《 様々な考えに触れ協働しながら問題を解決していく力 》

○将来、社会に出る子どもが、様々な個性あふれる集団の中で、他者を尊重し、考えや意見が異なる他者と協働しながら、学び環境を整えることが大切ではないでしょうか。



IV 子どもたちの明日のために (次のような学校が望ましいと考えました) (18～21頁)

【☆ 発達段階に応じた連続性のある学びの場を】

○子どもの育ちの発達段階に応じて、小学校低・中学年期と高学年期、中学生期と意識した学びの場を整えることが望ましいのではないのでしょうか。
○幼保園や小・中学校が円滑に接続する環境も大切ではないのでしょうか。



○地域の見守りの中で育つ、低・中学年だけで構成する学びの場(学校)(※)をつくることも考えてはどうか(児童数が減少した場合)。



【☆ 多様性ある集団の中での学びを】

教育の質を保障するために

○小学校では、少なくとも一つの学年に複数の学級があったほうが望ましいのではないかと。
○中学校では、小学校よりも更に大きな集団で、全ての教科で教科担任が複数そろえられるほうが、望ましいのではないかと。



○子どもに寄せた願いを共有し、幅広い人々と触れ合い、学べる場という点から、施設の複合化・多機能化を考えたほうがどうか。
○地域との連携を進めるためにも、通学区と行政区の関係が少しでも分かりやすくなればよいのではないかと。
○保護者負担への配慮も必要ではないかと。



【☆ みんなが集まって笑顔があふれる学校を】

○子どもの将来を見据え、複数の小学校(※を含む)と中学校がグループなどを組み連携し合い、小学校6年間と中学校3年間を連続している9か年とらえ、「発達段階に応じた連続性のある教育」を、全ての小・中学校で展開することが望ましいと考えます。



V 附帯意見

○一人一人の教員が、連続性のある教育の大切さを理解し、指導力等の向上に努め、実践に取り組むことが重要ではないかと。
○学校の在り方を検討する際は、教育的な視点を第一としながらも財政面からの検討も必要ではないかと。
○学校が持つ様々な機能面を配慮しながらも、教育的な視点を第一とした検討が必要ではないかと。

